

研究ノート

ウェスレーと地震

野村 誠

1995年の阪神淡路大震災、2011年の東日本大震災、そして4年以内に起こるかもしれないと言われている首都直下型地震・・・と、年々高まる地震に対する恐怖と不安の中で、ウェスレーの研究者として、過去の地震とそれに対するウェスレーの見解を知りたいと思い、調べ始めました。現代のように自然科学が発展していない時代のことでもあり、ウェスレーの見解に対して受け入れがたい部分もありますが、すぐれた伝道者の先輩として、地震を恐れ、戸惑う民衆にどう語りかけたのかを学ぶことは有益だと感じました。疑問や不可解な点を残しながらも、地震に脅える当時の民衆に共感しながら、ウェスレーの考え方を紹介したいと思います。「ウェスレーと地震」というテーマにふさわしい十分な参考文献が見つからず、未完成の研究ノートにすぎませんが、参考にしていただければ幸いです。

地震の原因

ウェスレーは、1750年の説教129「地震の原因と癒し」(SERMON CXXIX : The Cause and Cure of Earthquakes. *Works* 7 : 386—399)の中で地震について述べています。はじめに、その幾つかを紹介してみたいと思います。

「義なる神が罪人に、ここで下すすべての審判の中で、もっとも恐るべきそして破壊的なものが、地震である。」(Of all the judgments which the righteous God inflicts on sinners here, the most dreadful and destructive is an earthquake. *Works* 7 : 386)

ウェスレーによれば、今われわれの地上で危機的状況をもたらしたのは神で、

それによって、われわれは恐れを抱き、神に会う準備を強いられるというのです。(This he has lately brought on our part of the earth, and thereby alarmed our fears, and bid us “prepare to meet our God!” *Works* 7 : 386)

そして、ウェスレーの思想の中で見逃すことのできないのが、地震の道徳的原因です。

「地震は神の働きであり、神だけが地上に破壊をもたらす。」(Earthquakes are the work of the Lord, and He only bringeth this destruction upon the earth. *Works* 7 : 387)

「それが、どのような自然の原因によるものであろうとも、地震は道徳的原因である罪の結果引き起こされた神の行為であるということは、聖書を信じる者なら誰しも否定できない。」(Now, that God is himself the Author, and sin the moral cause, of earthquakes, (whatever the natural cause may be,)cannot be denied by any who believe the Scriptures; *Works* 7 : 387)

「地震は、神の正しい裁き、もしくは罪に対する罰として、靈感を受けた作家たちによって、明確に述べられている。罪が原因で、地震は神の怒りの結果である。」(Earthquakes are set forth by the inspired writers as God’s proper judicial act, or the punishment of sin : Sin is the cause, earthquakes the effect , of his anger. *Works* 7 : 387)

このように、ウェスレーが、地震や津波などの天災を神による審判、あるいは、人間の罪への罰ととらえていることは明らかです。しかし、ウェスレー自身、義人も悪人も、信仰深い敬虔な者も不信心者も、共に滅ぼされていることに対して疑問を呈していて、この問題についての理解は単純ではありません。

ウェスレーは、神の裁きを受け入れはするものの、何故、神は、罪なき者を滅亡させるほど大きな力で、破壊してしまったのか、悩みます。(Wherefore should he have overthrown all his works to destroy innocent men? *Works* 7 : 388)

そして、ウェスレー自身が、聖書と理性から導き出した結論は、「神の奇妙な判決」ということになります。(Let us then conclude, both from Scripture and reason, that earthquakes are God’s strange works of Judgment, — the proper effect and punishment of sin. *Works* 7 : 388)

イタリア、ジャマイカ、ペルーの地震

1692年 Sicily, Naples, Malta で全ての歴史の中でも最も恐るべき地震が起きたことをウェスレーは説教で取り上げています(筆者註：史実では、1693年1月11日にイタリアのシチリア島で地震 -M 7.4、死者8万人)。(In the year 1692 there happened in Sicily one of the most dreadful earthquakes in all history. It shook the whole island; and not only that, but Naples and Malta shared in the shock. *Works* 7 : 388)

「これが大災害の光景です」という一文に続く、ウェスレーの描く情景は、大震災以後に報道されてきた実況中継を連想させます。「壮大なカタニア (“Catania, one of the most famous, ancient, and flourishing cities in the kingdom” *Works* 7 : 388) は、その土台さえ見いだせない。18914人の住民のうち、18000人はそこで滅亡し、周辺の市や町では、254900人のうち60000人が死んだ。」(*Works* 7 : 388~9)

ちょうど同じ時期に、ジャマイカでも巨大地震が起きましたが、ウェスレーの説教集からその地震の様子を抜粋すると、我々が最近見聞きしたことと同じような恐怖の体験がありありと蘇ってきます：

1692年6月7日のジャマイカの地震については、ポートロイヤルの町の10分の9が崩壊し、その大半がカリブ海に沈み、ほとんどの家も教会も砂糖工場も製粉場も橋も、全島が投げ込まれ、岩も山も裂け、所によっては平地にされ、全部のプランテーションが破壊され海に呑み込まれた。この地震と津波により、人々が割れた地中に落ちたり、海水でおぼれ死んだりした。(*Works* 7 : 389-390)

およそ50年後のペルーの巨大地震についても、ウェスレーは、克明に伝えます：

1746年10月28日夜10時半には、ペルーの首都リマが地震で崩壊 (*Works* 7 : 391)、

そこには74の教会やチャペル、そして14の病院や診療所のある修道院があったが、廃墟となった。70人の病院の患者は、崩れてきた屋根の下敷きとなり誰も助けることが出来ずにベッドの上で死んだ。(*Works* 7 : 392)

同じ地震で、カヤオ(筆者註：Callao ペルー西部, Lima 付近の港市；同国第

二の都市)も海の中に一瞬のうちに消え去り、突然の巨大な津波が、何もかもすべてを破壊し奪い去った。(Works 7 : 392) 津波で約 5000 人の住民が溺れ死んだが、約 200 人の漁師と水夫は、自力で助かった。(Works 7 : 393)

こういう細かい描写の後に、ウェスレーはこのような自然災害を戦争と比較し、「平和のただ中であって、戦争よりも悪い弊害をもたらす」と語ります。(Now, if war be a terrible evil, how much more an earthquake, which, in the midst of peace, bring a worse evil than the extremity of war! Works 7 : 394.)

「それゆえ、神を、一瞬にして体と魂を地獄に投げ込むことさえ出来る全能の神を、私は恐れます!」とウェスレーは強調します。(Wherefore, I Fear God, even that God who can in a moment cast both body and soul into hell! Works 7 : 395)

「国民の悔い改め以外の何を持って国土の破壊を防ぐことができようか?」(What but national repentance can prevent national destruction? Works 7 : p.396) そして、ウェスレーは続けます。「神を恐れ、悪から離れ、悔い改めなさい。そして、悔い改めにふさわしい実を实らせなさい。この瞬間、あなたの罪を捨てなさい。」(Fear God, and depart from evil ; repent, and bring forth fruits meet for repentance ; break off your sins this moment. Works 7 : 396) つまり、回心による救いを説いているのです。

「神はあなたを、秤にかけて、救うべきか破壊させるべきかを考え量っておられる。」(God is weighing you in the balance, and, as it were, considering whether to save or to destroy! Works 7 : 396)

「悔い改めて、良き実を付けよ、あなたが切り倒されて火の中に投げ込まれないように。」(Therefore repent; bring forth good fruit; and ye shall not be hewn down, and cast into the fire. Works 7 : 397)

「悔い改めて福音を信ぜよ。主イエスを信じるならばあなたは救われるだろう。」(Repent and believe the gospel. Believe on the Lord Jesus, and ye shall yet be saved, Works 7 : 398)

「愛によって信仰は働き; 信仰は世に勝つ; 信仰は心を清め; もっとも小さ

な信仰でさえ山を動かす。」(Faith worketh by love; faith overcometh the world; faith purifieth the heart; faith, in the smallest measure, removeth mountains. Works 7 : 399)

英国の地震

『標準ウェスレー日記』Ⅱ(山口徳夫訳 イムマヌエル総合伝道団 1984年)

次に、日記から、幾つかウェスレーの言葉を紹介したいと思います。日記には、恐怖の体験によってウェスレー自身の信仰が試され、そして、強められている様子が伺えます。

1750年2月8日(木)

「12時15分頃、市の周辺に地震おこる。……あちこちに三回のはっきりした波動、すなわち振動が起って、それにつれて雷のような阿鼻叫喚が起った。じつに神は、この国民をお手やわらかにあしらって下さる! おお、私たちは悔い改めることによって、より苛酷な御怒りのもろもろの徴候を、防ぎたいものである!」(筆者下線)(『標準ウェスレー日記』Ⅱ 第三巻、361~2頁)

1750年3月8日(木)

「……夕刻、神はふたたび岩を砕きたもうた。私は、語るために神から与えられたみことばを、不思議に思った。けれども神は、その善しとすることを為したもうのである。今日、神は、ロンドンの人々に、第二の警告を与えて下さった。……」(筆者下線)

「今朝の五時十五分、私たちはふたたび地震の衝撃に出会った。それは二月八日の地震よりも、はるかに烈しかった。私が、自分の説教のテキストをくり返していたとき、「ファウドリ館」がひどく揺れたので、私たち一同は、「ファウドリ館」が頭上に倒れることを覚悟した。物すごい叫び声が、婦人や子供たちの口から起った。私は、すぐに叫び出した—『このゆえに、たとい地は変り、山は海の真中に移るとも、われらは恐れぬ。万軍の主は、われらと共におられる。ヤコブの神は、われらの避け所である。』すると神は、私の心に信仰を、

口には言葉を満たして、会衆の身体を震わせたと同じく、魂をも震わせたもうた。」

「大地は西方で揺れ、次に東方でゆれ、次にまた西方でゆれて、ロンドンからウェストミンスターにかけて揺れた。それは強烈な震動であって、遠雷のひびきのような轟音を発した。多くの家は大ゆれに揺れ、数個の煙突がうち倒された。けれども、それ以上の損害はなかった。」(筆者下線) (『標準ウェスレイ日記』Ⅱ 第三巻、365頁)

1755年6月2日(月)

Whiston-Cliffs (Yorkshire ヨークシャー、Black-Hamilton の近く)の大地震について、ウェスレーは日記に詳しく記しています(*Works 2* : 331-333)。少し長くなりますが、ウェスレーの細かい描写と動揺する心情を理解するために、標準ウェスレイ日記(山口徳夫訳)から、この日の記述を以下に抜粋引用してみます。

「去る三月二十五日、火曜日、それは復活祭の前週だったが、多勢の人々がヨークシャー県の山々の頂上のあたりに起った大騒音を聞いたので、早速ブラック・ハミルトンに行った。……水曜日にも、この道を通った凡ての人が同じような騒音を聞いた。木曜日の午前七時頃、……音響をきいたが、それは、彼らの説によれば、幾多の砲声のようでもあり、百雷が一時に落ちる音のようでもあった。そのひびきは、その絶壁の上から起るらしかったので、彼らが見上げると、広さ四、五ヤードの大きな石塊が頂上からすべり落ちてきていた。……夕刻七時頃、ある人がその側を馬で通ったところ、大地がひどく震動するのを感じた。すると間もなく、それぞれ数トンもあるような数箇の大石—すなわち岩が、大地から盛上ってきた。……金曜日と土曜日、大地は震動しつづけ、もろもろの岩は他の岩にころがり重なった。土もまた到るところで裂け目を生じ、それが日曜日の朝まで裂けつづけた。六月二日、月曜日。……私は、その絶壁の廢墟の大部分にわたって歩きまわったり、這ったり、よぢ登ったりしてみたけれども、その岩のなかに空洞がかつてあったような形跡もなかった。それどころか、固い石の一部分が裂けて、あたかも刃物をもって切断したかのように垂直に、しかも滑らかになっているのを認めた。……それに続いたところ

はダ円形に盛り上っていたが、その直径は三、四十ヤードあった。……そこから少し離れて、直径四、五十ヤードの地面があるが、これもまた完全に移動させられたに違はなく、その上には大小さまじまの岩がある。……

さて、われらはこの現象をどんなに考えるべきであるか？それは、単に、自然の法則によったものだろうか？ ……残された自然的原因は、圧縮された空気以外には何もないわけである。私は、圧縮された空気が原因だったと思う。なぜなら、現代流行の考え方によれば、地震の大動因は外気にあるそうだから、圧縮された空気が爆発したと言う以外に解釈しようがない。でなければ、その現象は何とも名づけようのない、非常識で、非自動的で、非哲学的な夢でしかなくなる。けれども、圧縮された空気が、どうしてこんな結果を生じさせたかを考えることは、むづかしい事だ。……いったい少量の空気が、強力な膨張をせずに、あんなにも大きな岩塊を、一つの固い巖から引き裂くことができた

であろうか？ また、少量の空気が膨張をせずに、この岩塊を粉碎して、その破片の幾つかを周囲の幾百ヤードまでも散らすことができたであろうか？ 同様、これらの大地の隆起を根こそぎ移して、こわさず、向きを変えずに、そのまま遠くへ移動させることができたのだろうか？ 私は、これらの事を信じ得るほどの偉大な信仰の勇者ではない。……

だとすれば、本当の原因は何だったのか？ それは実に、神以外の何ものでもなかったのだ。神が立ち上って、大地を恐ろしく震わせなされたのだ。神は、とくにあの場所をお選びになったのだ。(筆者下線) あそこでは毎年、上流社会の面々が大会を開いているので、彼らの多くがその震動をみて恐れたり、交通頻繁なイングランドの道路の一つを旅する凡ての人が、好むと好まざるとを問わず、遠隔の地からその震動のみを恐れたりさせるために、神がこのことを起しなされたのだ。)(『標準ウェスレー日記』II 第四巻、196~9頁)

ウェスレーは、眼前に広がる巨大地震の爪痕を克明に描写し、語り伝えることを自らの使命と心得ていたのでしょう。ウェスレーの長い日記に残る言葉の一つ一つが、時代を超えて、心に迫ってくるものを感じます。けれども、歴史的には重要と思われるリスボン地震については、意外にも、ウェスレーの言葉は短く、しかも、冷淡にすら感じます。以下にそれを引用しますので、注目し

て下さい。

1755年11月26日（水）

「うるさくせがまれましたので、リスボン地震についての静想（註）を書いた。それは私の最初の企画通りにでなく、幾らか通信的に書いたのだが、学あり、富あり、名ある異教徒、すなわち通称クリスチャンたちにとっては、それは素晴らしい著述だった。

註＝ポルトガルの主府。この地震が起ったのは1755年11月1日。
市の大部分は破壊され、三万以上の人命が失われた。」

『標準ウェスレイ日記』 II 第四巻、218～9頁）

さて、「リスボン地震」とは、人類史上、かなり重要な地震として位置づけられています。どのように重要なのか、そして、ウェスレーにとっては、どういう意味があるのかについて、次の章で扱ってみようと思います。

リスボン地震

まず、リスボン地震について、ヤフーのブリタニカ大辞典によって、その概要を説明します。

「リスボン地震 1755年11月1日のことであつた。この日の午前9時40分ごろ、突然の大地震がポルトガルの南西部を襲つた。一説によると、9時40分、10時、12時と3つの大地震が相次いで発生したといわれ、最初の地震による揺れは10分以上も続いたという。隣国のスペインをはじめ、イタリア、フランス、モロッコなどでも、かなりの揺れを感じた。とりわけ破局的な災害となつたのは、大西洋に面する港町のリスボン市で、最初の激震により市内85%の建物が倒壊して、2万人前後が即死した。次いで第2の地震が襲いかかり、残つた建物の多くが倒壊したうえ、火災も発生して燃えひろがり、犠牲者の数を増した。折しもこの日は、カトリックの祭日「万聖節」にあたつていて、人びとが教会で祈りを捧げているさなかに大地震が発生したため、教会の建物が潰れ、数千人が犠牲になつたという。生き残つた市民は、港の空き地などに

避難したが、やがて海水が沖へと引いていき、砂州が現れたかと思うと、一転して巨大な津波が襲来した。津波は、猛烈な勢いで市街地を呑みこみ、テージョ川を遡上して被害を拡大した。津波は繰り返し押し寄せて、町を洗った。津波による死者だけでも、1万人に達したといわれる。リスボンを襲った津波の波高は、6～15mと推定されている。」(ヤフーのブリタニカ大辞典)

このリスボン地震は、建築家で東大教授の隈研吾によれば、「歴史のハンドルを90度切るほどの大きな災害であったといわれている。近代科学も、啓蒙主義も、フランス革命も、すべてこの災害の産物であったと考える人さえいる」と言われます。(日本経済新聞 2011年8月19日 「ニッポン再興の時 下」)隈氏の言葉を借りれば、「災害が無ければ、神で十分だった。神によって人々は守られ、安心していられたのである。しかし、災害はその安心を打ち崩す。災害は、歴史の流れを大きく変化させるほどの決定的なインパクト、ダメージを人々の心に与える。その時、神が変わって、文明が必要になるのである。そして、その対災害システムの中核になってきたのが、建築という道具であった。」(同)ということになります。すなわち、「リスボン地震は、神が人類を見捨てたのではないかと考えざるを得ないほどのショックを、人々に与え」、「その絶望から近代科学や啓蒙思想が始まった」と言うのです(同)。

藤井厳喜も、『超大恐慌の時代』の中で、「リスボン大地震は、ヨーロッパの人々の心に大きな傷跡を残した」と書いていますが、その結果についての見方は、隈研吾とは違います。藤井氏によれば、「代表的な例を挙げると、あのジャン＝ジャック・ルソーもこの地震による被害から衝撃を受けた一人であり、その後、彼は都市文明に反対するようになり、より自然な生活様式を求める思想に転換している。」と、むしろ自然に帰ったことを主張しています。(藤井厳喜『超大恐慌の時代』日本文芸社、2011年 31頁)

リスボン地震によって近代科学が始まったと見る隈氏と、ルソーのように都市文明に反対するようになった者がいると主張する藤井氏で、その評価は異なりますが、それほど衝撃的な災害に直面した時、宗教家であるウェスレーが動

揺しなかった筈はありません。その激しい動揺こそが、ウェスレーの日記にそれほど素っ気無い、被害者に対しては、冷淡に思えるほどの言葉を吐かせたのではないかと推察できます。

宗教家のウェスレーは、神の救いを述べ伝えるのが仕事ですから、世の一般の人がどんなに絶望しようとも、「神は人類を見捨てた」と語ることはできません。なんとか、「神の救い」を絶望的な状況にある人々に伝えなければなりません。その苦悩が、ウェスレーの言葉には、見え隠れしているように思われます。

ウェスレーの記述をたどってみましょう。

『標準ウェスレー日記』(山口徳夫訳Ⅱ)でリスボン地震について言及されている箇所は、既に本論文で紹介してありますが、著作集XIの最初の論文“*Serious Thoughts occasioned by the late Earthquake at Lisbon.*” (*Works 11: 1–13*)も、リスボン地震についての論評として重要です。以下に、その抜粋を紹介します。

ウェスレーは、近代のクリスチャンについて、聖職者も含めて、美德は無く罪深かったと批評しています：

Thinking men generally allow that the greater part of modern Christians are not more virtuous than the ancient Heathens; perhaps less so; since public spirit, love of our country, generous honesty, and simple truth, are scarce any where to be found. On the contrary, covetousness, ambition, various injustice, luxury, and falsehood in every kind, have infected every rank and denomination of people, the Clergy themselves not excepted. (*Works 11 : 1*)

ウェスレーは、ジャマイカのポートロイヤルやペルーの首都リマ、そして、シチリア島のカタニアについても、「一人のロトもソドムから逃れられなかった」と表現することで、私たちにソドムとゴモラを連想させ、その結果、滅亡をそこに住んでいた人々の罪に起因するものと憶測させます：

Numbers sunk at Port-Royal, and rose no more! Many thousands went quick into the pit at Lima! The whole city of Catania, in Sicily, and every inhabitant of it , perished together. Nothing but heaps of ashes and cinders show where it stood. Not

so much as one Lot escaped out of Sodom! (*Works* 11 : 1)

ウェスレーにとって、自然災害は単に自然現象によるものではなく、神こそがその根本原因です。(What, then, could be the cause? What indeed, but God, who arose “to shake terribly the earth; who purposely chose such a place,” *Works* 11 : 5)

ですから、ウェスレーとしては、イタリアやジャマイカやペルーの地震は、ソドムとゴモラのように、そこに住んでいた人たちが罪深く、その為に、神の怒りを買ったのだと解釈したかったのだと推測できます。けれども、その後、ロンドンで、自らも地震を体験したウェスレーは、そう簡単には、地震を罪の結果として処理できなくなるのです。ロンドンでの地震を体験したウェスレーは、日記に、「私たちは悔い改めることによって、より苛酷な御怒りのもろもろの徴候を、防ぎたいものである！ (1750.2/8)」とか、「神は、ロンドンの人々に、第二の警告を与えて下さった。(1750.3/8)」とか、「それは強烈な震動であって、. . . けれども、それ以上の損害はなかった。(1750.3/8)」とか、自らは、決定的な被害を免れたことを強調します。その一方で、同じ英国の中でも、大きな被害を受けた地域については、「神は、とくにあの場所をお選びになったのだ。(1755.6/2)」と、冷淡です。

リスボン地震についての日記 (1755.11/26) の内容が同情のかけらも感じられないほど冷淡であったことは、既に、記述しました。これこそ、ウェスレーの苦悩の表れです。

大きな災害に見舞われた時、人は誰でも、「神に見捨てられたのではなからうか？」と悩むのだと思います。そして、信仰のある人は、「いや、そんなことはある筈がない！」と考え、自問自答し始めるのです。ウェスレーがそうであったように、神が何故こんなひどいことをなさったのか考え、反省し、悔い改め、これ以上ひどい目にあわないようにと祈るのです。ウェスレーの苦悩は、私たちの苦悩であり、私たちも、大きな災害から免れたときには、より大きな被害を受けた人たちに対して、冷淡になりがちなのかもしれません。神をどう信じ

たらよいのか、動揺が起こるからです。この問題に正解は無いのかもしれませんが、ウェスレーの「ヨハネの黙示録」における地震理解に注目してみたいと思います。

「聖ヨハネの黙示録」における地震理解

ウェスレーは、1750年の説教129「地震の原因と癒し」(SERMON CXXIX: The Cause and Cure of Earthquakes. *Works* 7: 386—399)の中で地震について述べています。はじめに、その幾つかを紹介してみたいと思います。

最後に、ウェスレー著作集 第二巻『新約聖書註解 下』(松本卓夫・草間信雄訳 新教出版社 1979年)を用いて、ウェスレーの思想に迫りたいと思います。

聖ヨハネの黙示録第8章5節(『新約聖書註解 下』 497頁)

「そして、御使は、その香炉を取り、祭壇の火をつぎ込んで、それを地面に投げつけた。すると、雷鳴、電光、もろ声、地震が、相次いで起こった。」(聖ヨハネの黙示録8:5)

下線の箇所の註解で、ウェスレーは、「とくに[火]を伴うと、こちらはすぐ次に起こる神の恐るべきさばきのしるしとも成る。」と解説しています。つまり、ウェスレーは、「地震」を「神の恐るべき裁きの印」の一つと考えていることがわかります。

聖ヨハネの黙示録第11章13節(『新約聖書註解 下』 511頁)

「その時、大地震が起こり、都の十分の一は倒れ、この地震で七千人が死に、生き残った人々は恐れおののいて、天の神に栄光を帰し奉った。」(聖ヨハネの黙示録11:13)

この箇所の註解で、ウェスレーは、「聖都に大地震が起こる。七千人が死に、残った者が回心する。」と、解説しています。そして、注目すべきは、この第11章13節の説明だけで、「回心」という言葉を六回も使っているということです。たとえば、「生き残った人々」の解説では、「残りの六万三千人は回心した。神の奥義の成就への、大いなる一歩である。こういう回心は、他のどこにも見

当らない。だから、エルサレムには、今までになかった程に聖なるまた大きい、教会が存在することになるであろう。」とあり、「栄光を帰し奉った」の解説では、「本当の回心の特質（エレ 3：16）」とあります。これらの解説から、ウェスレーが、地震から生き残った者が、それまでの罪を反省し、心から回心することをいかに重要と考えているか、伺い知ることができます。

結 論

ウェスレーは、地震や津波などの天災を、神による人間の罪への罰、審判と解釈して、ソドムとゴモラ(創世記 18 章 16 節から 19 章 29 節)と同類の出来事とみなしていたように思います。そしてソドムやゴモラのようにならないように、人々には、しきりに悔い改めを勧めています。地震や天災によって、来るべき審判への警告を発し、悔い改めと、神への立ち返りの必要を説き明かします。しかし、一方で、正しい者や罪なき者も同時に滅ぼされていく現実について、彼自身も思い悩んでいる様子が伺えるのですが、結論には至っていません。

ウェスレー自身、義人も悪人も、信仰深い敬虔な者も不信心者も、一瞬のうちに共に滅ぼされていく、戦争よりも悲惨な天災に対して、疑問を呈し、つまり神義論の問いとなるわけですが、彼には沢山の著述があるにもかかわらず、このことには十分な回答をしていないと思われまます。もちろん、あまりにも難しいテーマであるために、他の神学者も、この疑問に対して明確な回答をしているとは思えません。

しかしながら、ウェスレーの時代同様、頻繁に、しかも、身近に、天災に襲われる今日、宗教家として、改めて、この大きな難しいテーマに立ち向かわなければならないと痛感します。特に、被害に遭われた多くの友人や隣人に対して、失望させない神学的支えが必要です。本当の回心が必要なのは、むしろ、被害を免れ、地震から生き残った者、すなわち、私たちであることを肝に銘じて、この研究ノートを一旦、閉じようと思います。

(共愛学園前橋国際大学 准教授)